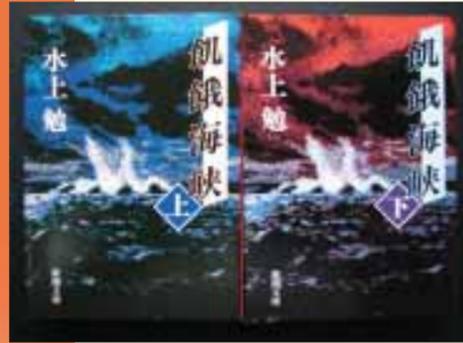


## 小説「飢餓海峡」

Consultant 会誌編集専門委員会



■写真1—新潮文庫版「飢餓海峡」水上勉著

昭和29年9月26日、北海道を襲った台風15号により、青函連絡船「洞爺丸」が函館港内で転覆した。同日、積丹半島の南の付け根に位置する岩内町で、台風による強風も影響し、町の家屋の8割が失火により焼失した。

水上勉の小説『飢餓海峡』は、この二つの事実をもとにミステリアスな物語が始まる。岩内は岩幌に、失火は放火に、洞爺丸は層雲丸とされ、時代は敗戦直後の混乱期である昭和22年9月20日に変更された。

『飢餓海峡』は「週刊朝日」に昭和37年1月より1年間連載されたが完結せず、後日大幅に書き足して刊行された。昭和40年には内田吐夢監督で映画にもなり、左幸子、三国連太郎、伴淳三郎などの名優のほか、若き高倉健も刑事役で出演している。

### 1—岩内

犬飼多吉ら三名は、岩内の質屋に強盗に入り証拠隠滅のために放火する。おりしも台風の強風で大火となり、その混乱に乗じて岩内駅から鉄道で逃走する。

岩内は国定公園雷電海岸の景勝地を擁する漁業の町で、明治からニシン漁で栄え、現在は品質日本一を誇るタラコの生産をはじめとする水産加工の町である。かつて旧国鉄岩内線(大正元年11月開通)が、函館本線の小沢駅と岩内駅を結んでいたが、昭和60年に廃止された。

### 2—函館

函館警察署の警部補弓坂吉太郎は、層雲丸遭難救助の際、乗船者名簿よりも二人多い死体の数に疑問を持つ。ほどなくして情報が入り、転覆事故と放火事件、この二つの事件が関連し、死体は質屋殺しの犯人の二人と確認され、残りの一人を追う捜査を開始する。

天然の良港に恵まれた函館は北海道の表玄関に位置し、海運によって発達した町で、北海道がまだ蝦夷地と呼ばれていた頃から各地との貿易が盛んであった。「函館」の名前の由来は、享徳3年(1454年)に箱に似ている館が築かれたことから「箱館」と呼ばれ、明治2年に蝦夷地を「北海道」と改めたのと同時に「函館」とした。嘉永7年(1854年)5月17日にペリーが函館に来航。安政6年(1859年)の日米通商友好条約により、函館は横浜・長崎



■写真2—転覆した洞爺丸の引揚作業



■写真3—函館山を背景にした青函連絡船が発着した旧埠頭。現在はメモリアルシップ摩周丸が保留された観光スポット

と共に日本で最初の貿易港となったことで急速な繁栄をとげた。欧米文化の影響を受け、町並みや建物には今もその面影があり、各国の様式を備えた教会・旧領事館・石畳の坂道がかもし出す風情はエキゾチックなムードである。青函連絡船は明治41年3月に就航。以降、青函連絡船～函館本線は本州と北海道を結ぶ大動脈となる。しかし昭和63年3月、青函トンネルが開通し、函館駅は鉄道連絡線の起終点駅ではなくなる。



■写真4—坂に立つ白壁に青緑の尖塔を持つビザンチン様式の「函館ハリスト正教会」



■写真5—瀟洒な八幡坂より望む旧埠頭とメモリアルシップ摩周丸

### 3—大湊

函館から下北半島に渡る小船で仲間二人を殺した犬飼多吉は、大湊の遊郭に寄り、親切にしてくれた杉戸八重に大金を渡して立ち去る。まっとうな金ではないと直感しながらも、八重は多吉を生涯の恩人と思い、決して口外しないと心に誓う。

大湊は自然環境に恵まれ、日本三大霊場の恐山をはじめ数々の風光明媚な観光地が点在する下北半島にある。明治35年に旧海軍が設置されて以来、軍港として栄えた。昭和35年、近隣と合併し「むつ市」となり今日に至っている。日本で唯一の原子力船であった「むつ」は、世界最大級の海洋地球研究船「みらい」として生まれ変わり、ここを母港としている。

### 4—東京、舞鶴、そして海峡

大金と恩人の遺留品を携え、新たな人生を歩もうと東京に出てきた杉戸八重であるが、新宿、池袋、神田と転々とした挙句、亀戸で娼妓となる。10年がたち、新聞に篤志家樽見京一郎の写真を見つけ、それが恩人の犬飼多吉に間違いなくと確信し、一目会いに舞鶴に向かうが……。舞鶴東署の警部補味村時雄は、事件の犯人は樽見京一郎ではないかと疑い、過去の足取り調査を開始する。函館の警察を退職した弓坂吉太郎も協力し、ついに樽見京一郎こと犬飼多吉を自供に追い込む。

『飢餓海峡』は「刑事コロンボ」や「古畑任三郎」のように最初に犯人が判明し、後はどのように犯人を追い詰めて行くかの物語である。しかし、謎解きではなく、戦後の混乱期に貧困から脱しようとする、主人公二人の人生の物語となっている。前半は薄幸な女杉戸八重の物語であり、後半は後戻りできなくなった犬飼多吉の物語である。多吉の渡った「海峡」は、決して口外できるものではなかった。

多吉は逮捕され、本人たつての希望により海峡を渡る船で函館に護送される。しかし10年前に渡ったこの海峡を、多吉は絶対に戻りたくはなかった。

(文章 塚本敏行)

#### 〈参考資料〉

- 1) 『飢餓海峡(上下)』水上勉 平成2年3月 新潮文庫
- 2) 『飢餓海峡』DVD 東映
- 3) 『函館港 みなとづくりの歩み』北海道開発局 函館開発建設部 函館港湾建設事務所
- 4) 『岩内町役場』ホームページ (<http://www.town.iwanai.hokkaido.jp/index2.shtml>)
- 5) 『函館市役所』ホームページ (<http://www.city.hakodate.hokkaido.jp/>)
- 6) 『むつ市役所』ホームページ (<http://www.city.mutsu.aomori.jp/>)

#### 〈取材協力〉

- 1) 北海道開発局 函館開発建設部 築港課

(写真提供：写真1、3、5、6、塚本敏行  
写真2、函館開発建設部函館港湾建設事務所  
写真4、山下茂  
写真7、竹内研)



■写真6—犬飼多吉らが小船で渡った津軽海峡。右が函館、左が下北方面



■写真7—杉戸八重が働いていた大湊。駅前から望む雨雲に霞む下北で一番高い釜臥山